

53

日本人移民一世がハワイで経験した健康に関わる問題

山崎 由花

東京医科大学医学教育学分野

背景・目的：2018年の日本は、少子高齢化の影響で生産人口の減少が急速に進み、業種によっては外国人の労働力に頼らざるを得ない。そして、外国人労働者の受け入れ拡大に向けた出入国管理法改正案が2018年11月、衆院法務委員会で実質審議入りした。これから、日本は本格的な移民社会に突入する可能性が大きく、日本国民は戸惑いや不安をかくせない。とりわけ、日本人はこれまで、均一な文化の中で生きており、異質なものを受け入れることになれていない。よって、時には外国人労働者に差別的な態度をとることや自分たちと対等とは思にくい。実際、日本で働く外国人は低賃金で、日本人がやりたがらない仕事をし、劣悪な生活環境を強いられている。しかし、忘れてほしくないのは、かつて、我々日本人も今の外国人と同じように肉体労働者として海を渡った歴史である。明治時代（1885年）、日本人は新天地での豊かな生活を夢見てハワイをはじめ様々な国にわたるが、実際は、希望とは裏腹に、現地での労働は過酷で、給与も低く奴隷に近い生活を強いられ、さらに、なれない気候と環境で健康を害する者も多かった。本研究は、ハワイのホノルルの地に渡った日本人移民一世の医療や健康問題について探索する。そして、本研究結果が150年後の時を経て、日本で働く外国人の健康に貢献することを願う。

方法：書籍、文献、インターネットから日系移民一世がハワイの地で経験した健康問題についての情報を継続的に収集している。

結果：まず、日本人移民の医療機関だが、日本人の医師はホノルルの医療機関で働くことはできなかった。よって、明治天皇が資金を提供し、クアキニ病院という病院を日本人労働者専用で設立し、日本語、そして、日本文化を理解できる日本人医師を招き入れた。ちなみに、日系一世たちは、白人の医師に診察してもらうことを拒んだ。そして、彼らは何に関しても、ハワイのものより日本のもののほうが優れているという感覚もっていて、西洋医療よりも灸や漢方などの代替医療を信頼して使っていた。なので、一世の日本人医師達は彼らのニーズに合わせて漢方薬などを処方し、ハワイ政府もそれを受け入れた。しかし、日本人の産婆の在り方はハワイ政府には受け入れられなかった。ハワイでは産婆は独立した医療職ではなく、医師のアシスタント、過去の遺産、貧困層の患者の出産の立会人ぐらいに捉えていた。しかし、日本では、20世紀初頭、産婆はなくてはならない女性の職業で、地域も高かった。また、日本の文化の一部にもなっていた。よって、日本人は産婆の必要性をハワイ政府に強く訴えたのだが、それは理解されず、その結果、日本人の一世女性の職業選択の幅を狭め、産婆による出産の選択肢も狭めた。また、日本人の疾患への価値観で、他の民族と大きく異なるところは、鬱などの精神疾患に強い嫌悪感も持っているところである。精神疾患患者が家族の中ででると、恥だと思ひ、治療を求めるなどの行為はせず、ひたすら隠していた。そして、この日本人の精神疾患へのスティグマはだいぶ緩和されているが現在もハワイに住む日系人の間に残っている。

結論：移民にとって、言語そして文化の違いは、医師の診察を受けるうえでかなりの障害になる。そして、今まで母国で自分たちが行っていた医療を移住先でも受けることを望む。それが、受け入れられないと医師と患者の間でコンフリクトを生じさせる可能性がある。しかし、医療全体を管理しているのは、医療を提供している国なのでどこまでニーズに答えられるかが課題である。今後は、日系移民一世がハワイで罹患した疾患なども調べていき発表する。